火塚古墳（ひづかこふん）

【所在地】 岐阜県加茂郡坂祝町酒倉
【築造時期】７世紀前半

周辺の古墳群　火塚古墳は南へ緩やかに傾斜する台地の縁辺部に立地し、横穴式石室の開口部を南に向けて築造されている。周辺に約 60 基の古墳が点在したとされる酒倉古墳群に属している。また、西方の神田･野田地区にも約 95 基からなる取組古墳群があったとされるが、残念ながら現在までにほとんどが滅失してしまった。150 基を超える美濃地域でも有数の大規模な古墳群が、現在の坂祝町取組（とりくみ）から酒倉にかけて存在していた（図 1）。墳丘の規模や立地から考えると、火塚古墳がこの大古墳群の盟主（めいしゅ）的存在と考えて間違いないだろう。

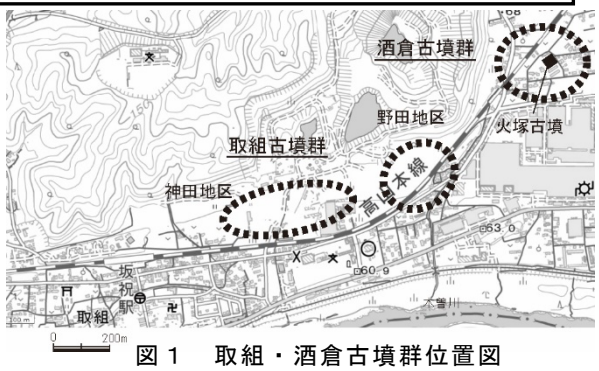

図１　取組・酒倉古墳群位置図

墳丘の特徴　火塚古墳の墳形（ふんけい）は、ほぼ正方形を呈する方墳（ほうふん）であり、墳丘（ふんきゅう）の途中（標高 66.0m 付近）に平坦面が巡っていることから二段築成（ちくせい）と考えられる（図 2）。

墳頂部は南北にやや長い長方形の平坦面を形成し、墳頂の標高は 71.7mを測る。

墳丘上段の規模は東西・南北とも約 24mで、高さは 4.7mとなる。石室開口部につながる墳丘下段の裾は標高 65m付近で、規模は東西 36.6m、南北 38.2m、高さ 1.5mとなる。墳丘下段の南辺中央に横穴式石室の開口部が設定され、開口部の前面には前庭部（ぜんていぶ）が設けられている。

前庭部の前には通路のようなテラス状の平坦面が東西に延びて墳裾を取り巻いており、その南側は段状になっている。この現況から南面には前庭部に至る平坦面を築くためのコの字状の基壇（きだん）が取り付けられていた可能性がある。火塚古墳が立地する地形は、南へ緩やかに傾斜しているため、古墳を築造する土台を盛土で造成したと考えられる。残念ながら後世の改変によって基壇と推測される部分の全体像を把握するのは困難であるが、この部分を含めれば東西がやや長く、墳丘の高さが 6.7mで、一辺の長さが 40mを超える超大型方墳となる。

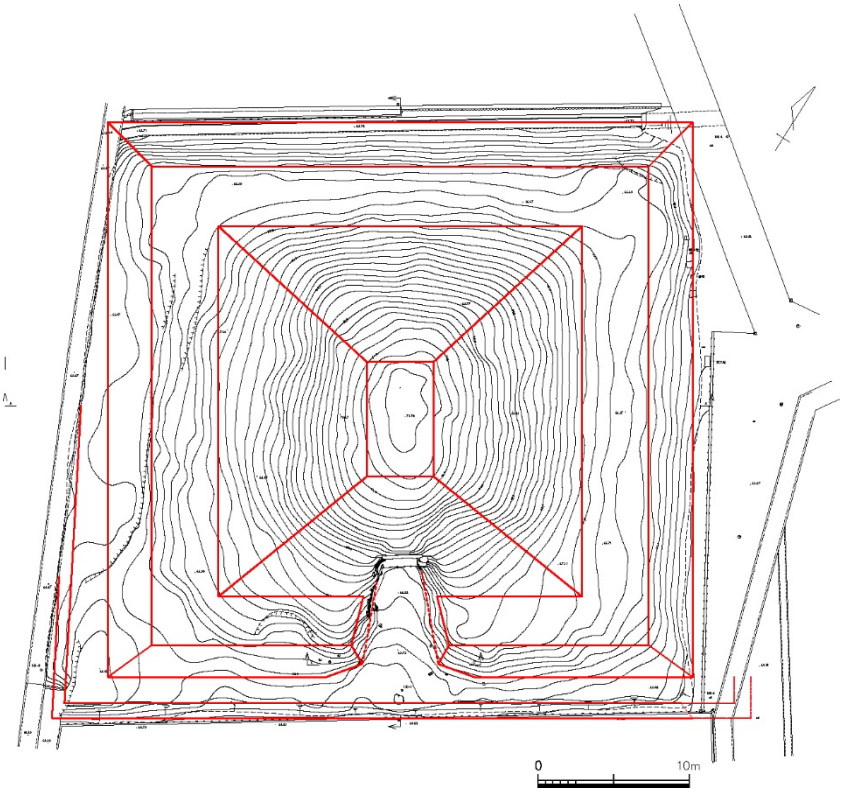

図２　火塚古墳推定墳丘復元図(S=1/500)

石室入口（前庭部より）

内部主体　内部主体は横穴式石室である。『村誌』に「火の玉を避けるために避難した」とあるように古くから盗掘を受けて開口していたものと思われ、出土遺物などはわかっていない。

石室は南方向に開口し、前庭部を含めた石室の全長が 19.2mを測る。玄室は長さ 5.2m、最大幅 2.5m、最大高約 2.6m、羨道は長さ 7.9m、最大幅 2.6m、最大高約 2.4mを測り、石室長（玄室＋羨道）は 13.1mとなり、美濃地域においても屈指の規模を誇る（図 3）。

石室内部（玄門より）

玄室（げんしつ）の平面形はやや胴張りで、側壁（そくへき）はやや大きめの割石（砂岩）を３～４段に積み上げている。玄門（げんもん）の袖石は内側に突出させて立柱状となり、奥壁は縦長の巨石の横に上下に割石を積んでいる。縦断面形はわずかに孤状を呈する。羨道（せんどう）は玄室と同様に大きめの割石を積む。平面形は玄門から前庭部に向けてやや広がり、天井も同様に前庭部向けてやや高くなる。前庭部は羨道から連続して石積があるが、石材はやや小ぶりの割石となり、石室の積み方とは異なる。平面形は「八」の字状に大きく広がり、ここは葬送儀礼（そうそうぎれい）に伴う空間であったと想定される。また、この部分は天井石もなく、墳丘盛土で覆われなかったものと考えられ、閉塞（へいそく）後も古墳の存在を示していたものと思われる。

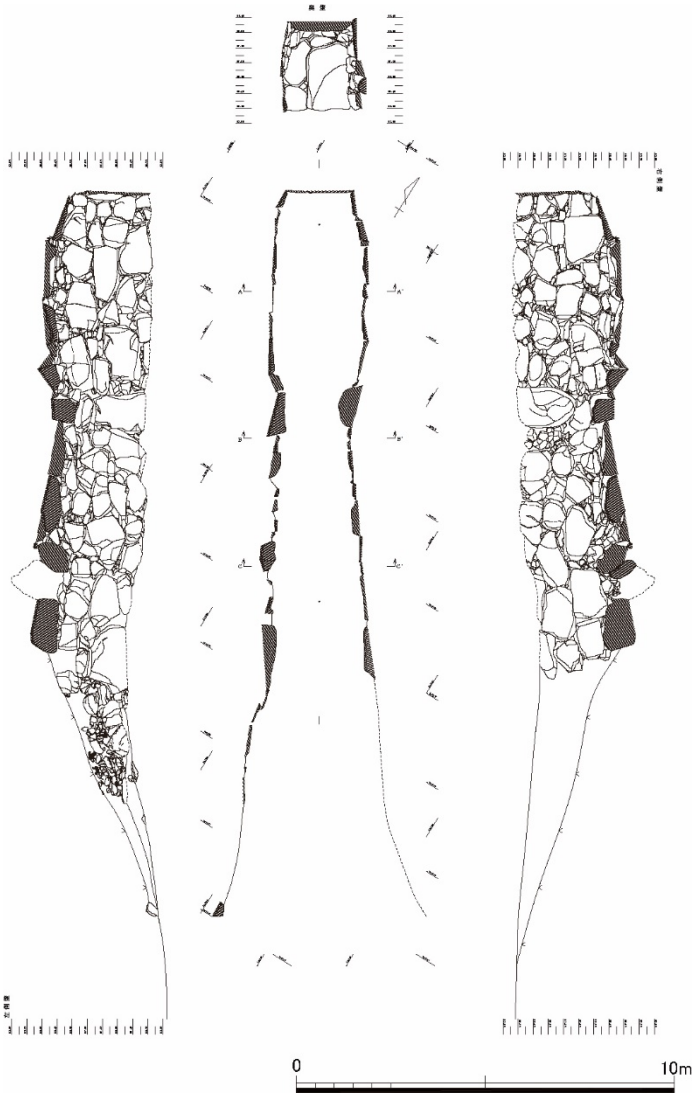

図３　火塚古墳横穴式石室実測図（S=1/200）

古墳の評価　火塚古墳は墳丘及び横穴式石室の形態から７世紀前半頃に築造されたと考えられる。岐阜県だけでなく東海地方でも最大級の方墳であり、木曽川中流域を代表する首長墓（しゅちょうぼ）として評価するべき重要な古墳である。また、それまで古墳が築造されなかった地域に、巨大方墳を盟主に突如として大規模な古墳群の造墓活動がはじまる状況からは、中央の政策との関連などといった極めて政治的な意図を持って営まれた大古墳群であった可能性が想定される。

【参考文献】
小川栄一 1931「加茂郡古墳調書」『郷土研究資料』第３号
中井正幸 2023「群集墳における墓地構造Ⅱ-木曽川中流域が提起する問題」岐阜聖徳学園大学紀要第 62 集

編集：科学研究費基盤研究（Ｂ）「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」
(22H00712)2022 年度（島田崇正・森島一貴）
発行：坂祝町教育委員会